Verruciform xanthoma の2 症例

松田 耕策・村山 一郎

Two cases of verruciform xanthoma

Kohsaku MATSUDA・Ichiro MURAYAMA

Abstract: In this paper, two female cases of verruciform xanthoma are reported.

Case No. 1 was a 22 year old female who first noticed a swelling of gingival mucosa 3 years ago. Oral examination revealed a slightly whitish, broad based lesion with granular surface 11×11 mm in size on the 65| site of palatal gingiva. The clinical diagnosis was papilloma and the histological diagnosis was verruciform xanthoma of papillary type.

Case No. 2 was a 55 year old female with roughly surfaced gingival lesion which was first noticed 2 months ago. Oral examination revealed a slightly raised, whitish lesion of 10×15 mm size on the 7| site of lingual alveolar mucosa. White sponge nevus was suspected clinically, with the histological diagnosis of verruciform xanthoma of flat type.

No relapse occurred in either case after treatment.

Key words: verruciform xanthoma, histological type

結 言

Verruciform xanthoma は上皮の乳頭状の増殖，および泡沫細胞の増殖よりなる粘膜疾患で，1971年に Shafer¹⁾により初めて報告されて以来，本邦では10数例²⁻¹³⁾報告されている。

今回，われわれは本症の2例を経験したので，若干の考察を加え報告する。

症 例

症例1

患 者：22歳 女性。

初 診：昭和56年10月。

主 訴：65| 部口蓋歯肉の腫脹。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：約3年前，65| 部口蓋歯肉を舌で触れ，同部の腫脹に気付いたが，疼痛などの自覚症状もなく，大き

さはほとんど変化しないため放置していたが，結核検診の際同部の病変を指摘され，精査のため当科を紹介され来院した。

現症：全身所見：体格は中等度，全身状態は良好で，顔貌は左右対称である。

口腔内所見：65| 部口蓋歯肉に大きさ11×11mmの境界明瞭な無茎性，隆起性の病変が認められ，表面は顆粒状で，色は正常歯肉よりやや白く，弾性硬で圧痛はない(写真1)。また病変周囲の粘膜に発赤，腫脹は認められない。

X線所見：同部の骨にとくに異常所見は認められない。

臨床検査所見：とくに異常値は認められない。

臨床診断：乳頭腫。

処置および経過：局所麻酔下で，病変より3mm離して骨膜を含めて摘出し，創部を抗生物質塗布ガーゼで覆い，さらに軟レジン床で圧迫した。骨膜および骨には変化はみられず，また病変と歯根膜との連続は認められなかった。2年を経過した現在，再発などの異常所見は認められず，経過は良好である。

病理組織学的所見：過錯角化を伴った上皮が乳頭状に増殖し，乳頭腫様の組織像を呈している(写真2)。結合組織乳頭内に限局して，小型ではほぼ円形の核を有する泡沫細胞の出現が認められる(写真3)。また乳頭内に結合組織の変性および炎症性の細胞浸潤がみられ，多数の乳頭の中にはわずかにしか泡沫細胞の出現がみられないも

東北大学歯学部第2口腔外科学教室

(主任：手島貞一教授)

Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Faculty of Dentistry, Tohoku University (Chief: Prof. Teiichi Teshima)

受付日：昭和58年10月21日

写真1 症例1の口腔内所見
65|部に病変(矢印)がみられる

写真2 症例1の病理組織所見
乳頭腫様を呈している (H-E 染色, ×50)

写真3 症例1の病理組織所見
泡沫細胞の集簇がみられる (H-E 染色,
×250, 右下×500)

写真4 症例1の病理組織所見
一部に泡沫細胞の出現, 炎症および結合
織の変性がみられる (H-E 染色, ×200)

のもあり, 乳頭によって泡沫細胞の出現程度に差が認められる(写真4). また Touton 型巨細胞はみられない.

病理組織学的診断: verruciform xanthoma, papillary type.

症例2

患者: 55歳 女性.

初診: 昭和57年1月■日.

主訴: 7|部舌側歯槽粘膜の違和感.

家族歴: 特記事項なし.

既往歴: 1年前に某内科で高血糖を指摘されたが, 当科受診1か月前の検査では正常であった. その他特記事項なし.

現病歴: 2か月前に, 7|部舌側歯槽粘膜を舌で触れ, ザラザラしているのに気付いたが, 疼痛などの自覚症状がないので放置していたところ, 違和感が消退しないので, 病を心配し当科を受診した.

現症: 全身所見: 体格は肥満型, 全身状態は良好で, 顔貌は左右対称である.

口腔内所見: 7|部舌側歯槽粘膜に大きさ10×15 mm のわずかに隆起する病変が認められ, 色は周囲粘膜より

やや白く, 表面は粗糙で顆粒状を呈しており, 圧痛はない(写真5). また周囲粘膜に発赤, 腫脹などは認められない.

X線所見: 同部の骨にとくに異常所見は認められな

写真 5 症例 2 の口腔内所見
歯槽粘膜に病変（矢印）がみられる

写真 6 症例 2 の病理組織所見
一定の長さで上皮脚が伸びて、真皮に著明な炎症がみられる（H-E 染色，×100）

写真 7 症例 2 の病理組織所見
乳頭内に泡沫細胞の集簇がみられる
（H-E 染色，×800）

膜以外に発生した例としては、外陰部に発生した Stanta Cruz²⁰⁾ の 2 例と陰茎に発生した Kraimer²¹⁾ の 1 例がみられるのみである。

口腔粘膜に発生したもの部位別では歯肉、歯槽粘膜に発生したものが多く、外国の報告では、Neville¹⁴⁾ の 51 部位中 32 部位（62.7%）、Nowparast¹⁵⁾ の 54 例中 23 例（42.6%）が歯肉、歯槽粘膜に発生している。一方、本邦の報告では竹之下⁶⁾ の下唇から歯槽粘膜にかけて発生した例、およびわれわれの 2 症例を含め、すべての症例が歯肉、歯槽粘膜に発生した例であり、verruciform xanthoma の好発部位としては、歯肉、歯槽粘膜があげられる。歯肉・歯槽粘膜に verruciform xanthoma が発生しやすい理由として Gehrig¹⁶⁾ は、歯肉、歯槽粘膜は咀嚼による持続的な外傷作用を受け、上皮の外傷性嵌入が起こりやすい部位であることをあげており、また原因としては、慢性的刺激を指摘している報告が多い^{4, 8, 11~13, 16, 18)}。

本症と全身疾患との合併については、Shafer¹⁾ が糖尿病に合併した例、柳沢⁷⁾ が原発性胆汁性肝硬変症に合併した例を報告しており、柳沢⁷⁾ はその因果関係について、自験例は原発性胆汁性肝硬変症に続発した黄色腫であるとしている。

われわれの症例 2 が一時期、高血糖を指摘されたことがあるが、当科に来院する 1 か月前に改善しており糖尿病との関係については不明であった。

局所病変に続発した例としては、Gehrig¹⁶⁾ が口腔

い。

臨床検査成績：とくに異常値は認められない。

臨床診断：白色海綿状母斑の疑い。

処置および経過：局所麻酔下で病変周囲 3 mm 離して、健康粘膜を含めて病変を切除した。1 年 9 か月を経過した現在、再発などの異常所見は認められず、経過は良好である。

病理組織学的所見：最表層には錯角化がみられ、上皮は軽度乳頭状を呈し、上皮脚は一定の長さで伸びており、上皮下結合組織内に炎症性細胞浸潤が認められる（写真 6）。結合組織乳頭に限局して、胞体の淡明な、ほぼ円形の核を持つ泡沫細胞の集簇がみられるが Touton 型巨細胞は認められない（写真 7）。

病理組織学的診断：verruciform xanthoma, flat type.

考 察

Verruciform xanthoma は Shafer¹⁾ が報告して以来、口腔粘膜に発生した報告例が圧倒的に多く^{2~10)}、口腔腔

粘膜に発生した尋常性天疱瘡の全身のステロイド療法で治癒したのち、7年後に舌に verruciform xanthoma が発生した例を報告しており、Graff ら¹⁷⁾ は長い間、口腔粘膜疱疹に罹患していた患者の付着歯肉および頬粘膜に verruciform xanthoma が発生した例を報告している。また坂下ら¹⁸⁾は verruciform xanthoma 発生近接部に fibrous overgrowth と mucous cyst を合併した症例を報告している。

これらは局所の慢性炎症性疾患に続発あるいは合併した症例であるが、われわれの2症例には verruciform xanthoma の発生部位にそれを誘発するような前駆病変あるいは合併病変は認められなかった。Shafer¹⁾ によれば verruciform xanthoma は組織学的に、一定の長さに伸びた上皮脚の乳頭状扁平上皮過形成がみられ、真皮乳頭に限局して xanthoma 様の無数の組織球が認められるとしており、Nowparast ら¹⁵⁾ はさらにこれを疣贅型 (verrucous type)、乳頭型 (papillary type) および平板型 (flat type) の3型に分け、54例中それぞれ24例、17例および13例であったと報告している。われわれの症例1は乳頭型で、症例2は平板型であり、本邦の報告例の多くは^{2,5,8,9,12)}乳頭型であった。

本症の本態については、われわれは今までの報告者^{4-6,9-13)}と同じように腫瘍性病変ではなく、炎症性の反応性病変であると考えている。その根拠としては、泡沫細胞が結合組織乳頭内に限局して出現し、乳頭部以外の真皮結合組織深部まで増殖して認められる報告例がなく、泡沫細胞が自立性の増殖傾向を示していないこと、泡沫細胞の増殖部が被膜で覆われていないこと、真の xanthoma にしばしばみられる Touton 型巨細胞が認められないこと、われわれの2症例を含めて、乳頭および真皮結合組織内に炎症所見が認められる報告^{2-7,9,11-13,15)}が多いことなどがあげられる。

本症における上皮の乳頭様増殖と結合組織乳頭部の泡沫細胞との関係について、Zegarelli ら¹⁶⁾ は外傷や炎症によって二次的に上皮の下方への増殖が起り、壊死に陥った上皮細胞の細胞膜脂質を macrophage が貪食して泡沫細胞になるとしている。

一方 Cobb ら¹⁹⁾、佐藤ら⁹⁾は何らかの刺激により上皮下に脂質代謝異常が起り、macrophage が脂質を貪食して泡沫細胞に変化し、その反応によって上皮の乳頭様増殖が起ることとしている。

われわれの症例1の場合には、結合組織乳頭によって泡沫細胞の出現程度に差がみられ、また乳頭内結合組織の変性および炎症性細胞浸潤を伴っている所見が認められ、今後さらに乳頭内に泡沫細胞が増殖していく過程にあると思われることから、われわれは Zegarelli ら¹⁶⁾と同様に上皮の乳頭状の増殖が先に現れ、次いで上皮増殖部への慢性刺激により、炎症性細胞浸潤および結合組織の変性がみられるようになり、結合組織乳頭に局所的な

脂質代謝異常が起り、それを macrophage が貪食して泡沫細胞が出現してくると考えている。

小島ら²²⁾は、腫瘍性の xanthoma cell と炎症性の pseudoxanthoma cell は形態的に差はなく、用語的な区別も厳密ではないとしているが、坂下ら¹⁸⁾は本症を炎症性産物と考えていることより、本症の乳頭部に出現する泡沫細胞には pseudoxanthoma cell の用語が用いられるべきであるとしている。われわれも本症の本態は腫瘍ではなく、慢性刺激によって発生する炎症性の反応性病変であると考えていることより、坂下ら¹⁸⁾の意見に賛成であり、本病変の名称も Shafer¹⁾が提唱した verruciform xanthoma とするよりは、むしろ、verruciform pseudoxanthoma とした方がより適切ではないかと考えている。

結 語

われわれは、22歳・女性の口蓋歯肉および55歳・女性の舌側歯槽粘膜に発生した verruciform xanthoma の2症例を報告し、あわせて若干の文献的考察を行った。

なお、本論文の要旨は第14回みちのく歯学会(郡山市, 1982, 10)において発表した。

引 用 文 献

- 1) Shafer, W.G.: Verruciform xanthoma. Oral Surg 31: 784-789 1971.
- 2) 菊地正明, 飯塚芳夫, 他: Verruciform xanthoma の1例. 日口外誌 25: 181-185 1979.
- 3) 竹下信義, 佐藤方信, 他: Verruciform xanthoma の1症例——とくに光顕的ならびに電顕的検討——. 岩医大歯誌 4: 34-38 1979.
- 4) 井出文雄, 奥田修平, 他: Verruciform xanthoma の1例. 日科誌 28: 75-81 1979.
- 5) 大木葉博通, 戸塚盛雄, 他: 下顎歯肉に生じた Verruciform xanthoma の1例. 日口外誌 25: 81-84 1979.
- 6) 竹之下康治, 緒方弘和, 他: 下口唇粘膜の Verruciform xanthoma. 日口外誌 25: 128-131 1979.
- 7) 柳沢繁孝, 大木葉博通, 他: 下顎歯肉に生じた Verruciform xanthoma の2症例(抄). 日口外誌 25: 250 1979.
- 8) 瀧川富雄, 佐藤 廣, 他: 下顎歯肉に生じた Verruciform xanthoma の1例. 日大歯学 55: 21-25 1981.
- 9) 佐藤隆吉, 菊地正明, 他: Verruciform xanthoma の1例. 日口外誌 27: 628-632 1981.
- 10) 藤崎卓志, 富田幸伸, 他: Verruciform xanthoma の1症例(抄). 日口外誌 27: 1202 1981.

- 11) 服部吉幸, 古賀賢三郎, 他: Verruciform xanthoma の 1 症例. 日口外誌 28: 872-875 1982.
- 12) 松本 断, 吉田裕招, 他: 下顎歯肉に発生した Verruciform xanthoma の 1 例. みちのく歯誌 13: 52-54 1982.
- 13) 坂下英明, 玉井健三: Verruciform xanthoma の 1 例とその文献的考察. 日口外誌 29: 1047-1051 1983.
- 14) Neville, B.W. and Weathers, D.R.: Verruciform xanthoma. Oral Surg 49: 429-434 1980.
- 15) Nowparast, B., Howell, F.V., et al.: Verruciform xanthoma. Oral Surg 51: 619-625 1981.
- 16) Gehrig, R.D., Baughman, R.A., et al.: Verruciform xanthoma in a young male patient with a past history of pemphigus vulgaris. Oral Surg 55: 58-61 1983.
- 17) Graff, S.G., Burk, J.L., et al.: Verruciform xanthoma. Oral Surg 45: 762-767 1978.
- 18) Zegarelli, D.J., Zagarelli-Schmiat, E.C., et al.: Verruciform xanthoma. Oral Surg 40: 246-256 1975.
- 19) Cobb, C.M., Holt, R., et al.: Ultrastructural features of the verruciform xanthoma. J Oral Path 5: 42-51 1976.
- 20) Stanta Cruz, D.J. and Martin, S.A.: Verruciform xanthoma of the vulva. Am J Clin Pathol 71: 224-228 1979.
- 21) Kraimer, B.B., Waldema, A.S., et al.: Verruciform xanthoma of the penis. Arch Dermatol 117: 516-518 1981.
- 22) 小島 瑞, 高橋 潔: 黄色腫症の概念(続). 最新医学 21: 812-831 1966.